

65

60

55

50

歌舞伎十八番内

解け脱だつ

芭川あは様さま

割わり烹ひ

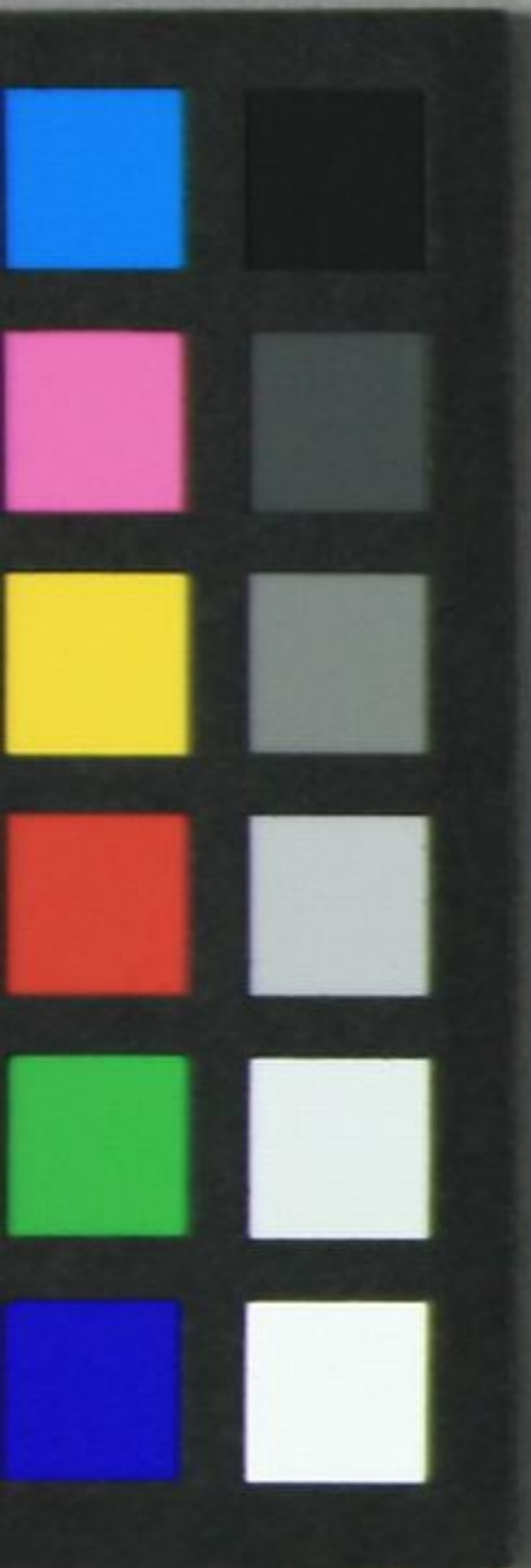
鯉魚こい腸のぼろ

第三編

青盛堂

加々右板

久保田くぼ春作はる祭まつり
守川まも周重しゅう画え





A518

3

168-8371

何ふ様

ねらう里

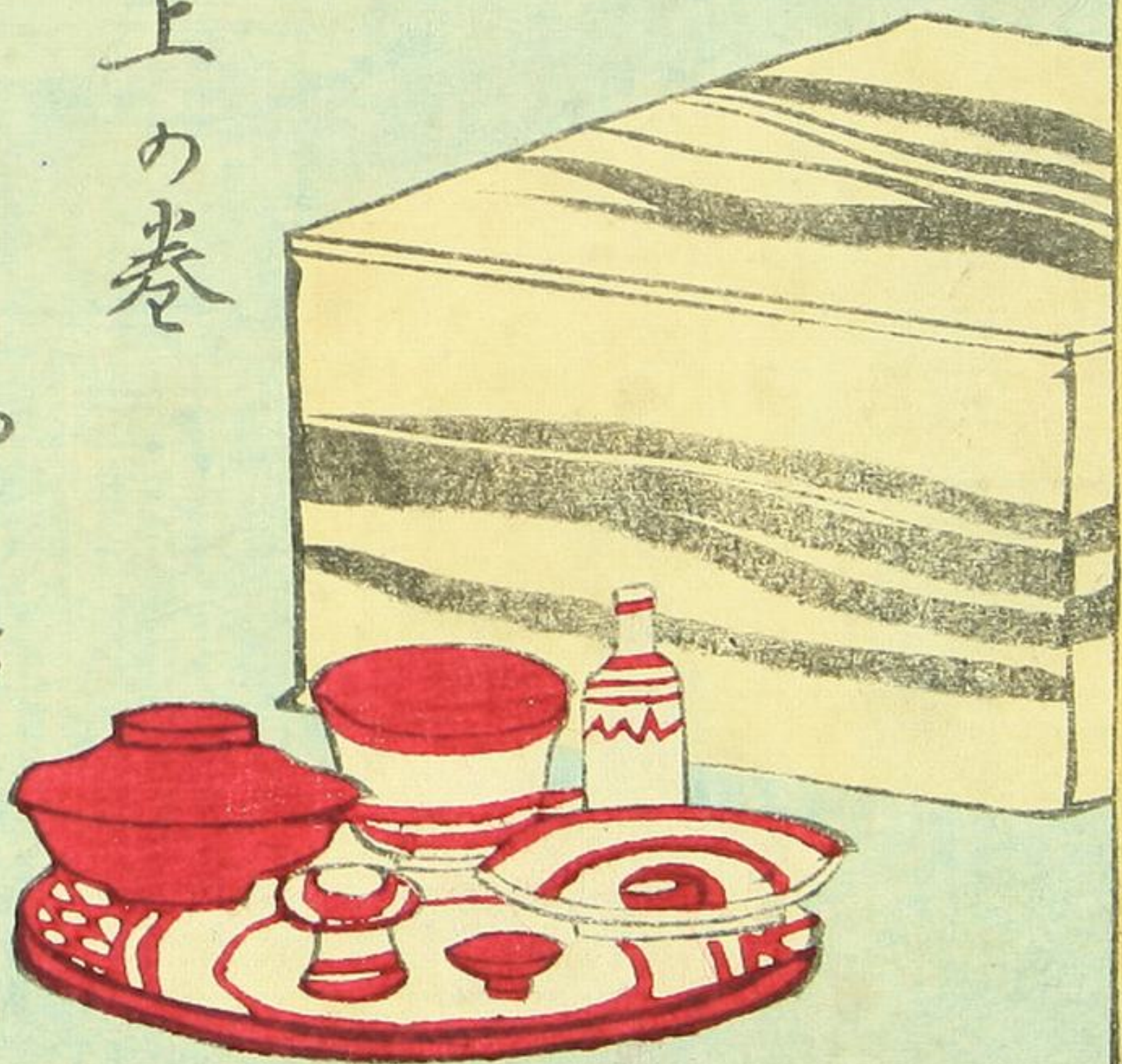
鯉魚橋

三編 上の巻

考作終

用多画

かき吉
せん



<48-8371>

此合巻を娼妓買ふ比諭べ、初編ハ則ち初會あり裏ハ

二編の肝腎要、作者ハ娼妓、畫工ハ衣袋と部屋の

奇麗ごと、畫割ハおろり本文と引立させる巧みの筆先

名小ハ當時賣出トの周重とん後見おまぶ引込ハ

於の字名同様、戲名もぬひさうが、床より硯の海淺、手管

も何も白波也、他人の作意と借着の打襦、大の荒磯も

三會目、お馴染とつけて頂戴とあらひ

明治十四年夏

久保田ひこく

巻三



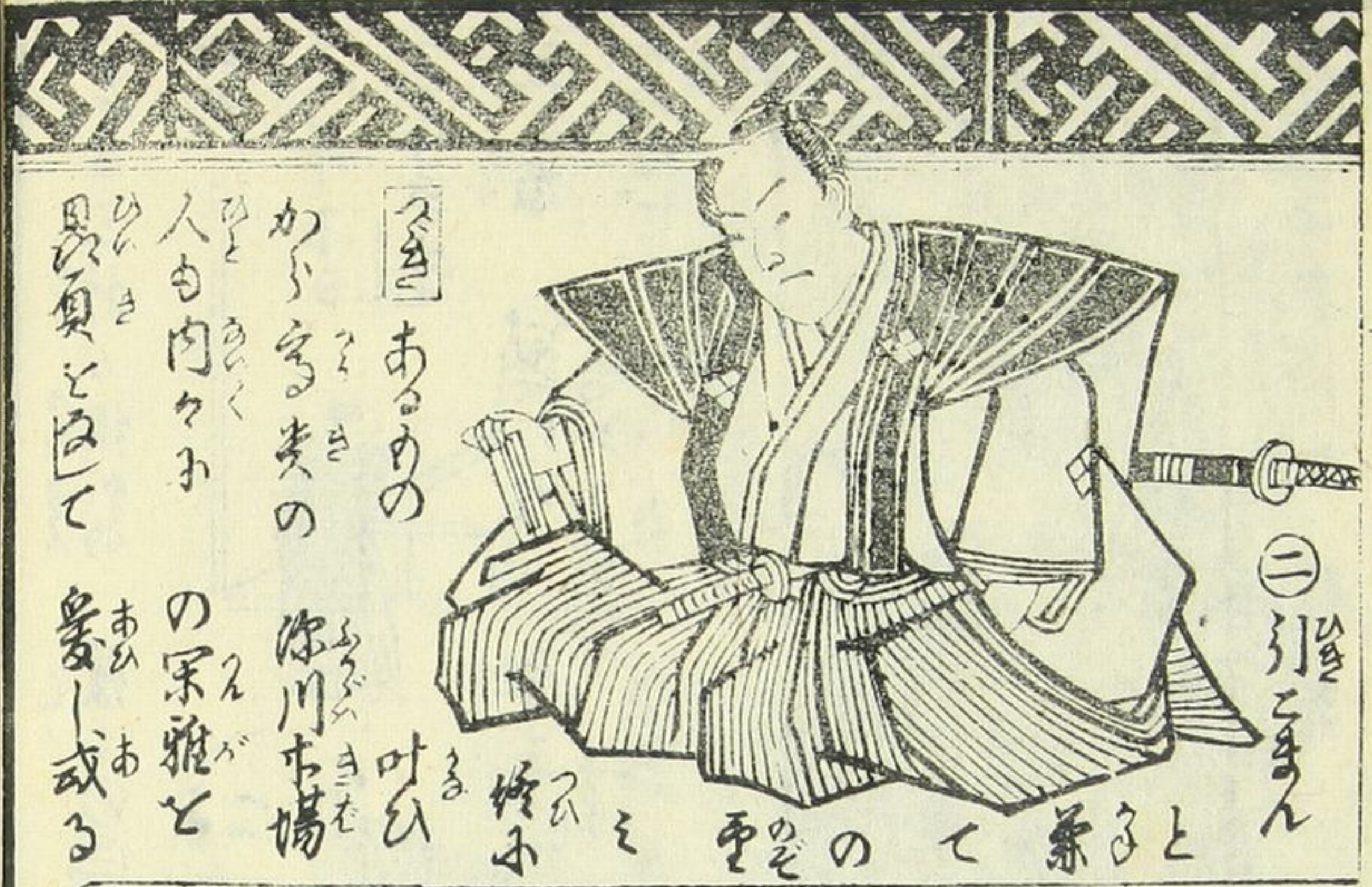
深見の意の
まう以心經の
感とて團十
郎がよきと
夢こそなる

二九幾三二



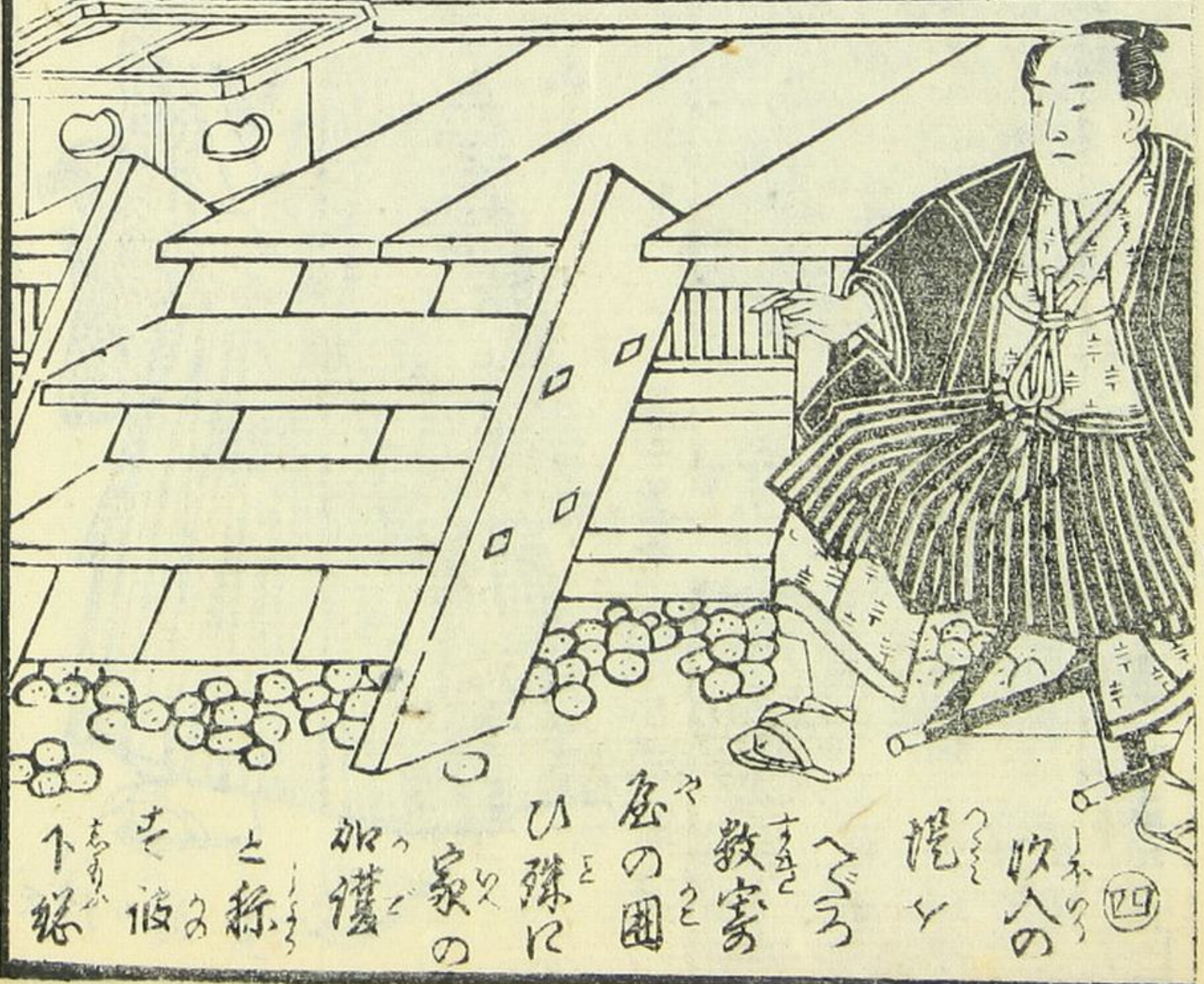
奥女中深見

三九幾三二



あるもの
かゝる美の
人由内々か
思ふと返て

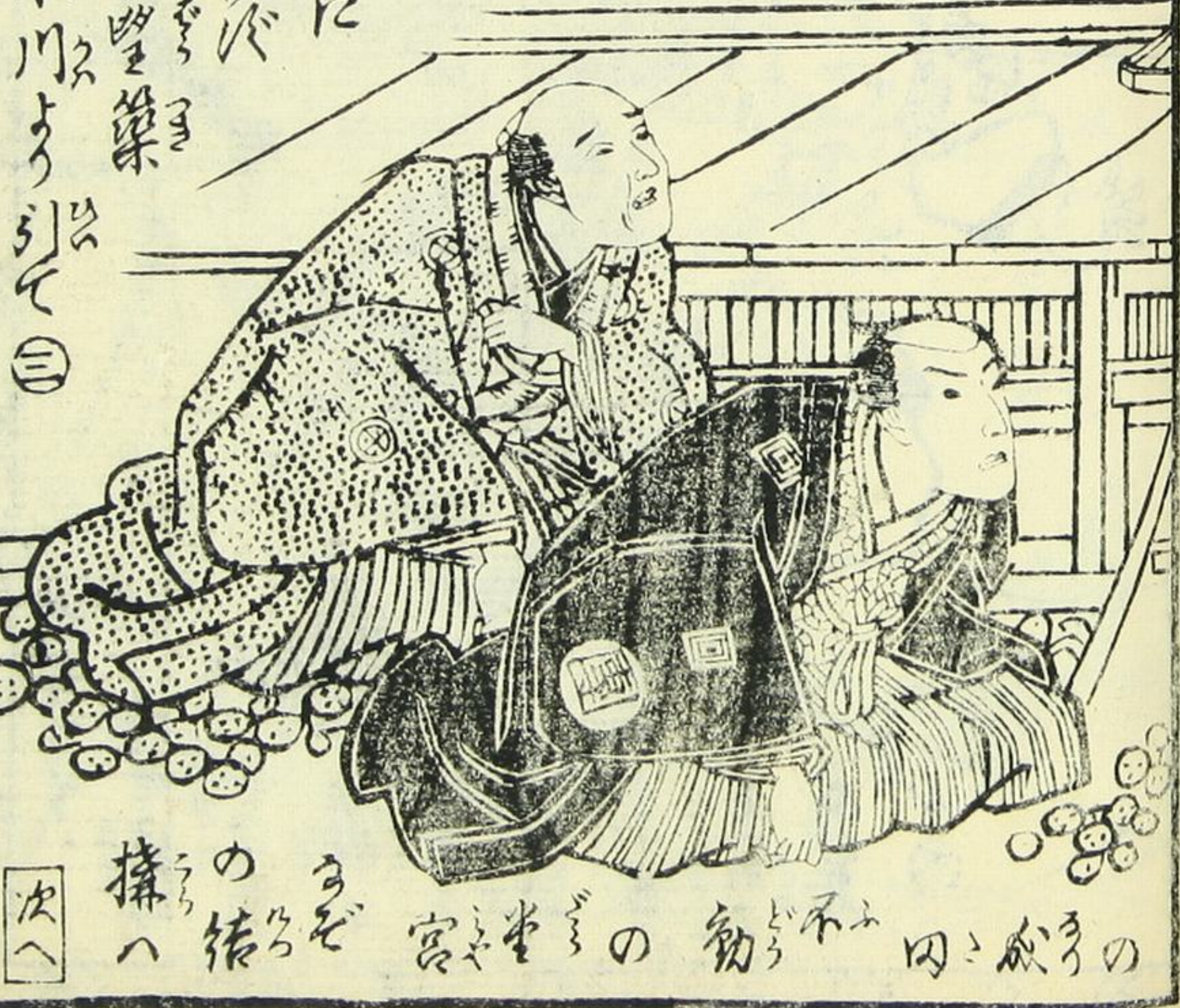
二引まん
葉子と
の茶碗と



四
吹合の
洗
茶碗
家の
ひ珠に
庭の
と糸
下

自宅へ
かづけの
て秋
あまの
以市中の
さひて市在へ

見ゆる
水青の
一家
と家
うつ
普傳の
お好き
結核ハ
中々細に
受さる
庭の眺望
山泉水川より



次へ
の結
宮
勅
四

八代目三升父
孝養と
町奉行
美と賜

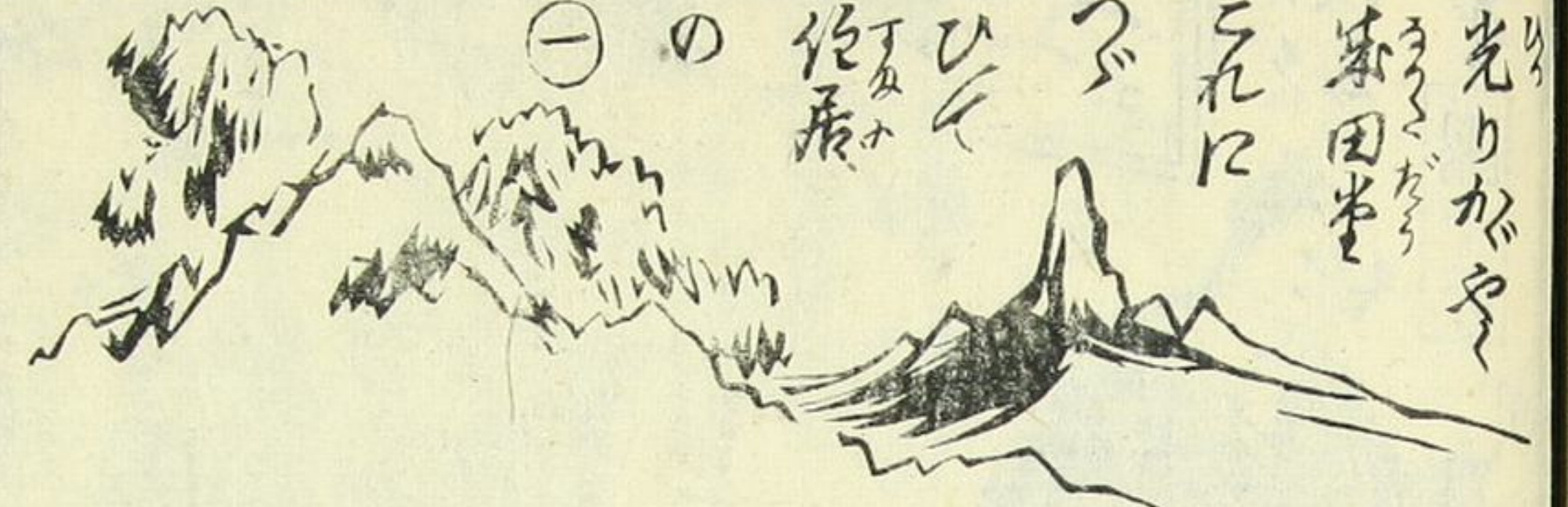
王祥の鯉の故事

つぎ
令銀珠玉
とありおめて

②
建築
いづれも
長押つくり
あて橋
の抱杖代
杉の一枚



④
返す波の
面を
ぬ籍の
風情を
已相七代
月堂十弟
ハ想の
多ひ處
が



①
光りかや
家田半
これに
ひく
伝居
ありさぬおゑに
因の人々ハ七代因
と名稱し市場
程おとめんでハ
三才の小児お智
之扱ふひかく理
判ハ外お鼓ハ
もあふ磔の

⑥
あぢいて
月結と
依つる
月の番号
人もあつと
そぶ故父お等
一死一家まる
彼多藤屋の
松本幸四郎
小次





権之助
 菊次郎
 小團次
 梅幸
 彦三郎



團十郎
 梅幸
 彦三郎

権之助

菊次郎

小團次
 梅幸
 彦三郎

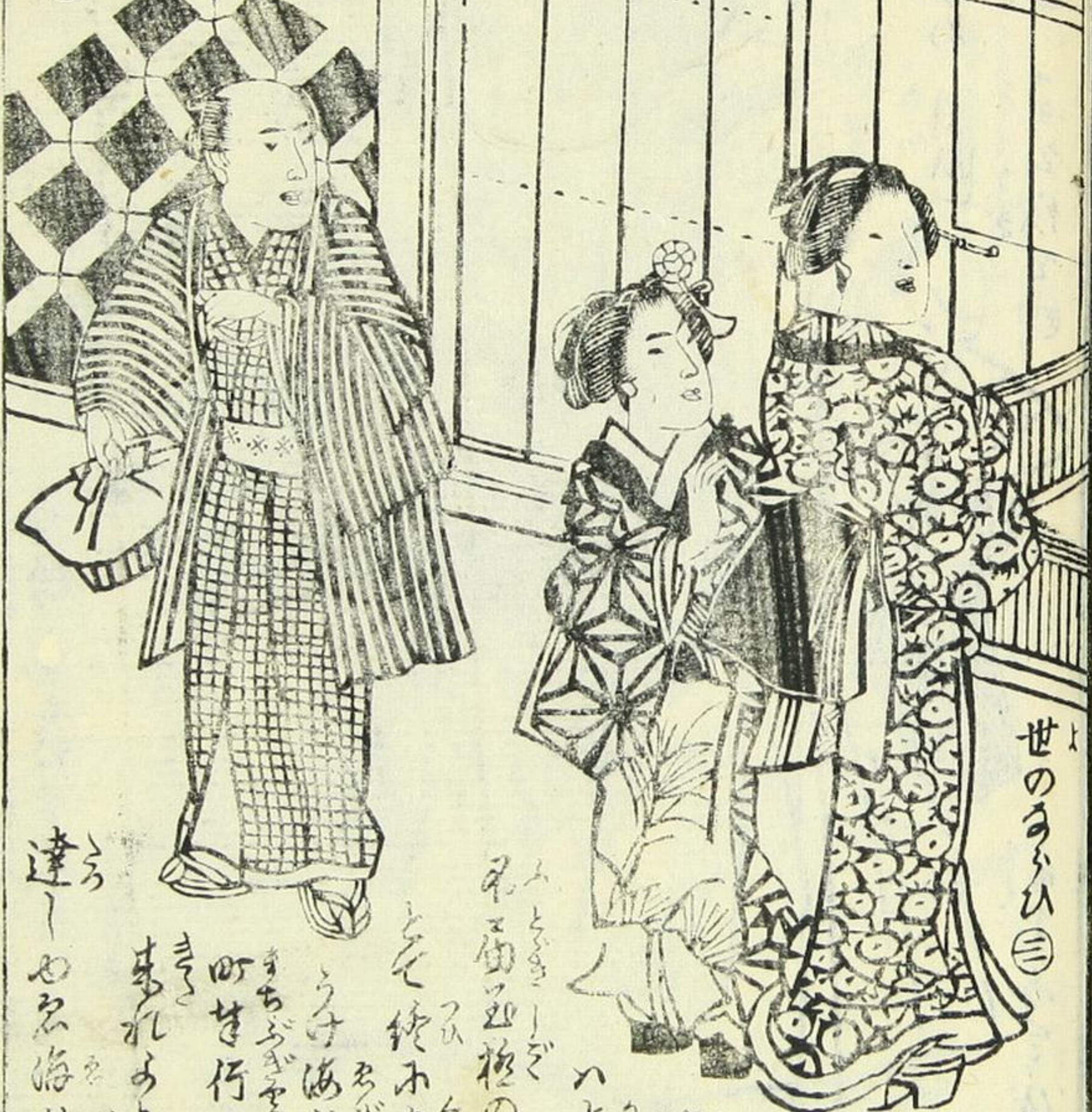
團十郎

梅幸

彦三郎

九藏
 梅幸
 彦三郎

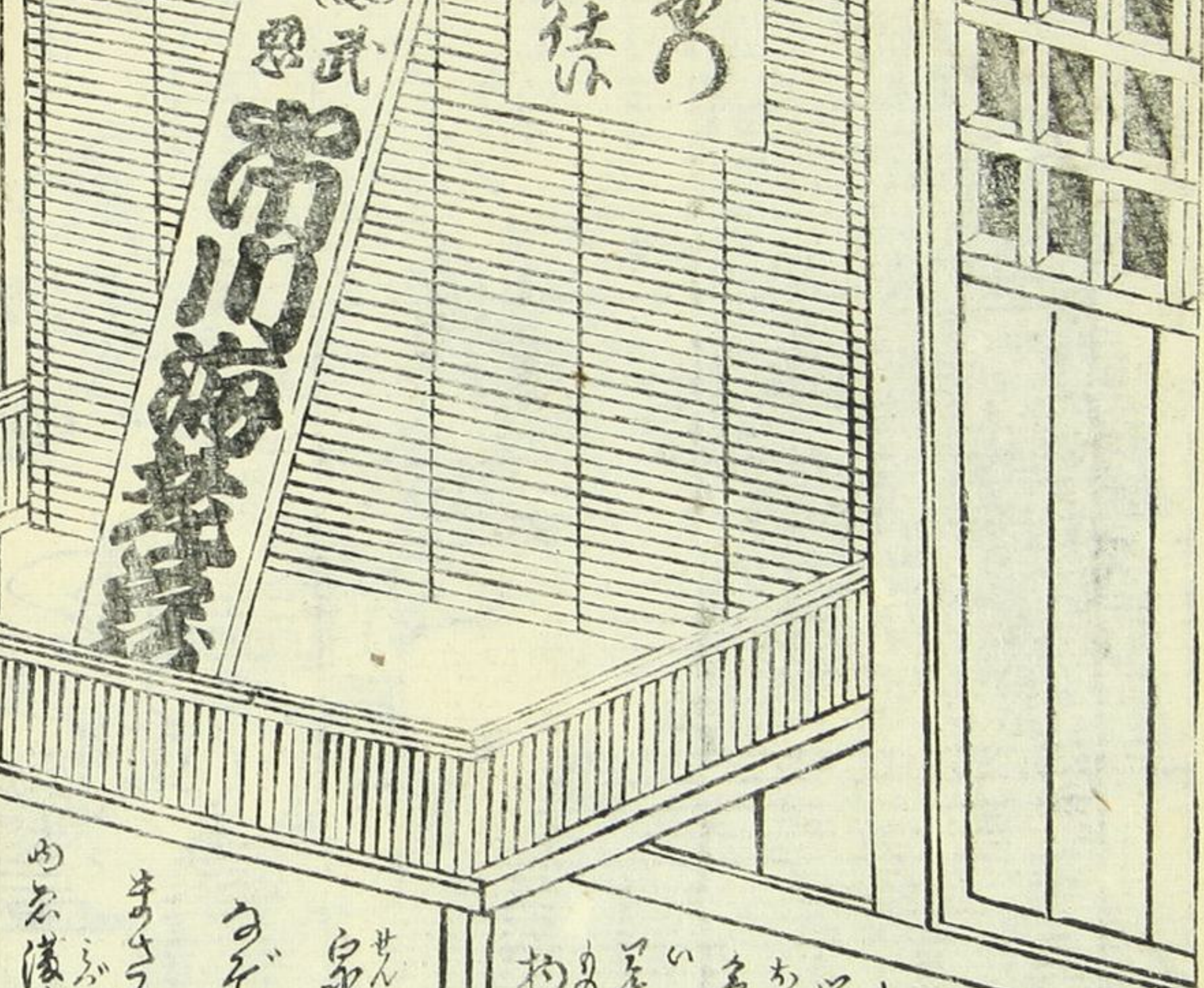
小の
 ね共
 家の
 繁昌
 主の
 なくお
 教家
 好之風
 と上
 たる故
 家作ハ



世のまらひ
 達一也
 海老花
 次へ

荒後三上

糸
 終に
 海老
 日
 びん
 と
 奪
 と



善物まで
 多
 美
 物と
 泉水の樽へ
 府の洪有
 外宅
 二



荒後三上

三石 三十一

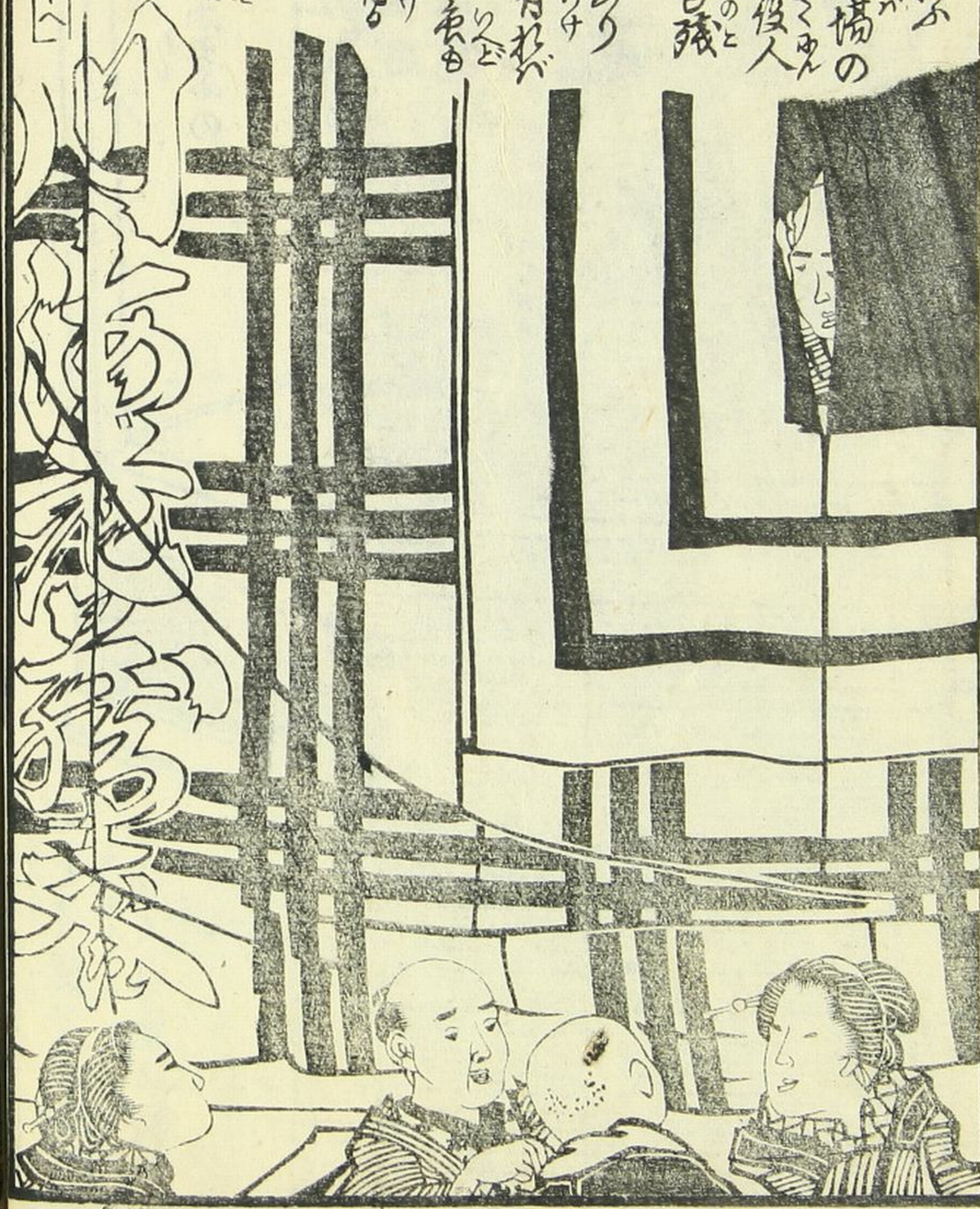
つぎ

されが深川本場の
家居るを日役人
出張して是も残

らに願ふとあり
ま々に封平付は
我所有の物とある

あてびきとけ
る叶ひはつら
あも外おはる

自死父の罪
科あ代目へ中へ



荒磯割京鯉魚腸

五編 久保田彦作著
守川周重画

籬の菊探鏡

三編 渡辺文京撰
守川周重画

冬見立闇鳩

三編 篠田仙果作
守川周重画

舎 錦繪問屋

日本橋區西國吉川町五番地
青盛堂 加賀屋 堤吉兵衛

久保田彦作綴

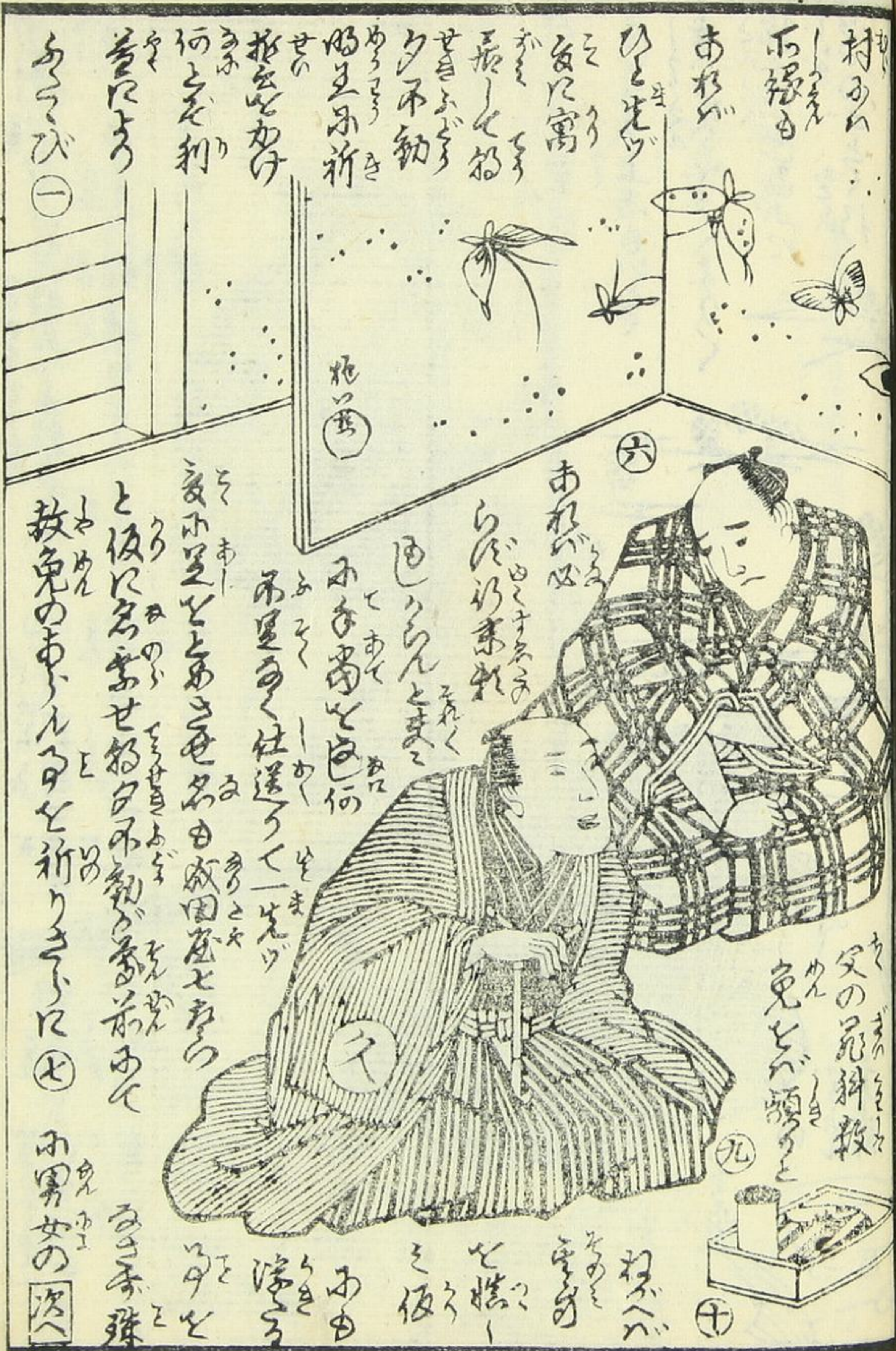




作るす
 下徳成田
 不動の
 あり
 代々伝
 ろり市川
 子々
 子々

③ 赦免の典ありんと
 海若花が重々
 也名八代月由
 安徳は
 ④ 江戸よ
 足徳りの足 数の
 茶田珠小昭王の加儀五

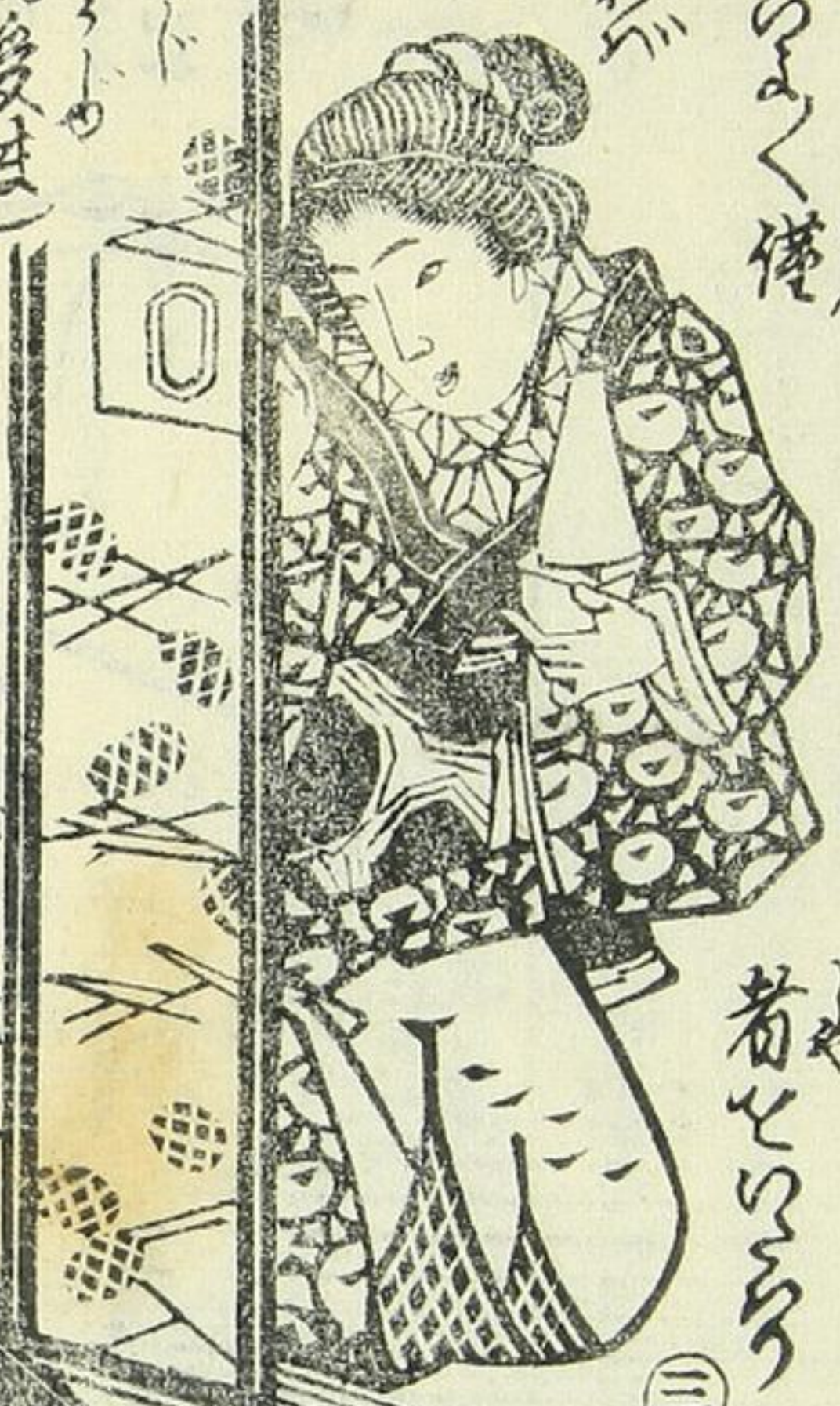
⑧ 化りてはる
 とホ一に不孔ぬ
 祈りなりと扱ゆ
 江戸の茶十席が



村あり
 雨縁も
 あり
 ひと先ッ
 女に寓
 長しと婦
 夕不動
 昭王示祈
 世の
 世の
 何とを利
 善なる
 ありて一

⑥ ありて
 らんは来れ
 色うらんとま
 ありて何
 不星るく仕送るて一先ッ
 交小星ととあさ色名由成田を七なる
 と仮に名案せ給夕不動が善前あり
 赦免の典ありんとを祈りて一先ッ
 ⑦ 小男女の次へ
 父の冠斜赦
 免とん頭と
 ⑨ ありて
 ありて
 ありて
 ありて
 ありて

つぎ 交りつたの室へ入れと早の
 坂とあると云ふ邪淫のりよる妻由
 遊之手のよく備
 膝掛け
 三井が
 孝心
 天小遣ト
 休の初受は
 まつろ上あゆいとき
 賞賛ありくよりく
 探索はあふに
 吟のどとくは



者せいのり
 三

ひのく
 江戸橋ひと
 作せ付らるる
 父海若翁へ
 孝悌つと
 多くの良書を
 傳へ母と娘の信
 おるす針文が
 枕をうせ

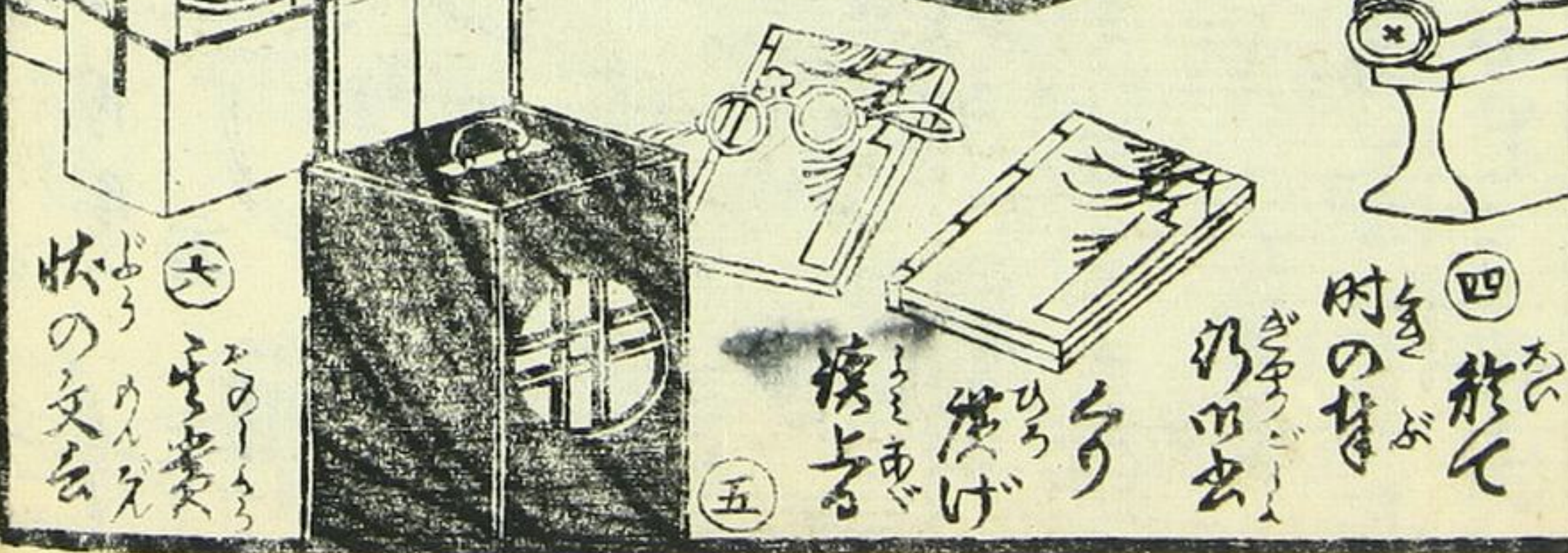
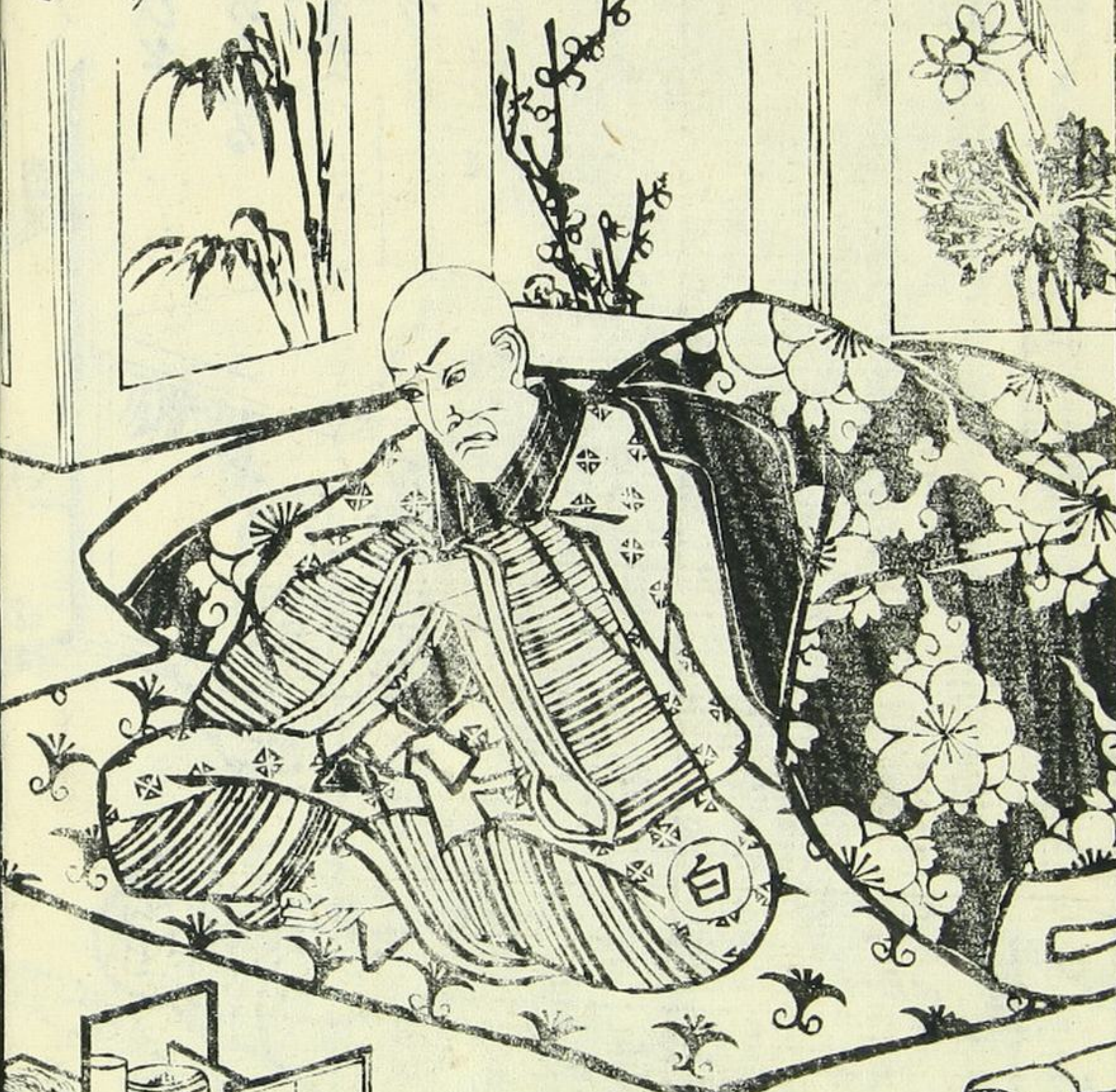


四 花とつた世に
 せ秋白へ舞をうと
 面が人字多く煙刺
 ふりれとあゆまゆ由標
 せよ
 しのりも
 多かふ心
 能中狂
 次が不
 並に快
 いかか
 芝居
 の
 荒涼



五
 六
 あかつ
 の茶ま
 まりと茶
 わのち
 若けりるれは探索
 山月を新地あめめ
 け由りあく出取て夜へ

町身 乃更 久六兼て 海老 藤が 由天保 十三宮 新より 田身と



四 形て 時の替 乃更 五 横と 六 状の文云

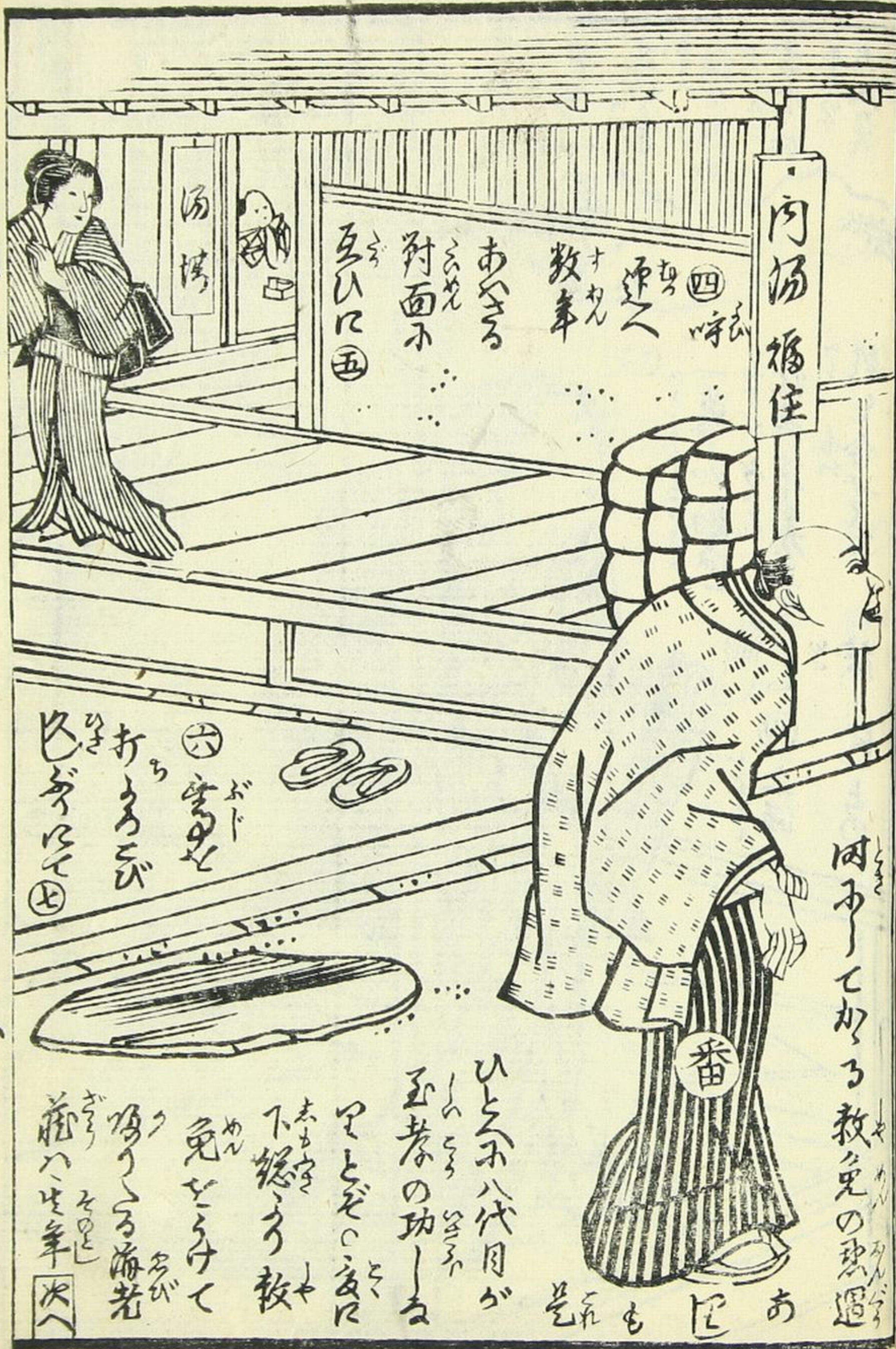
懐て衣 功多 免

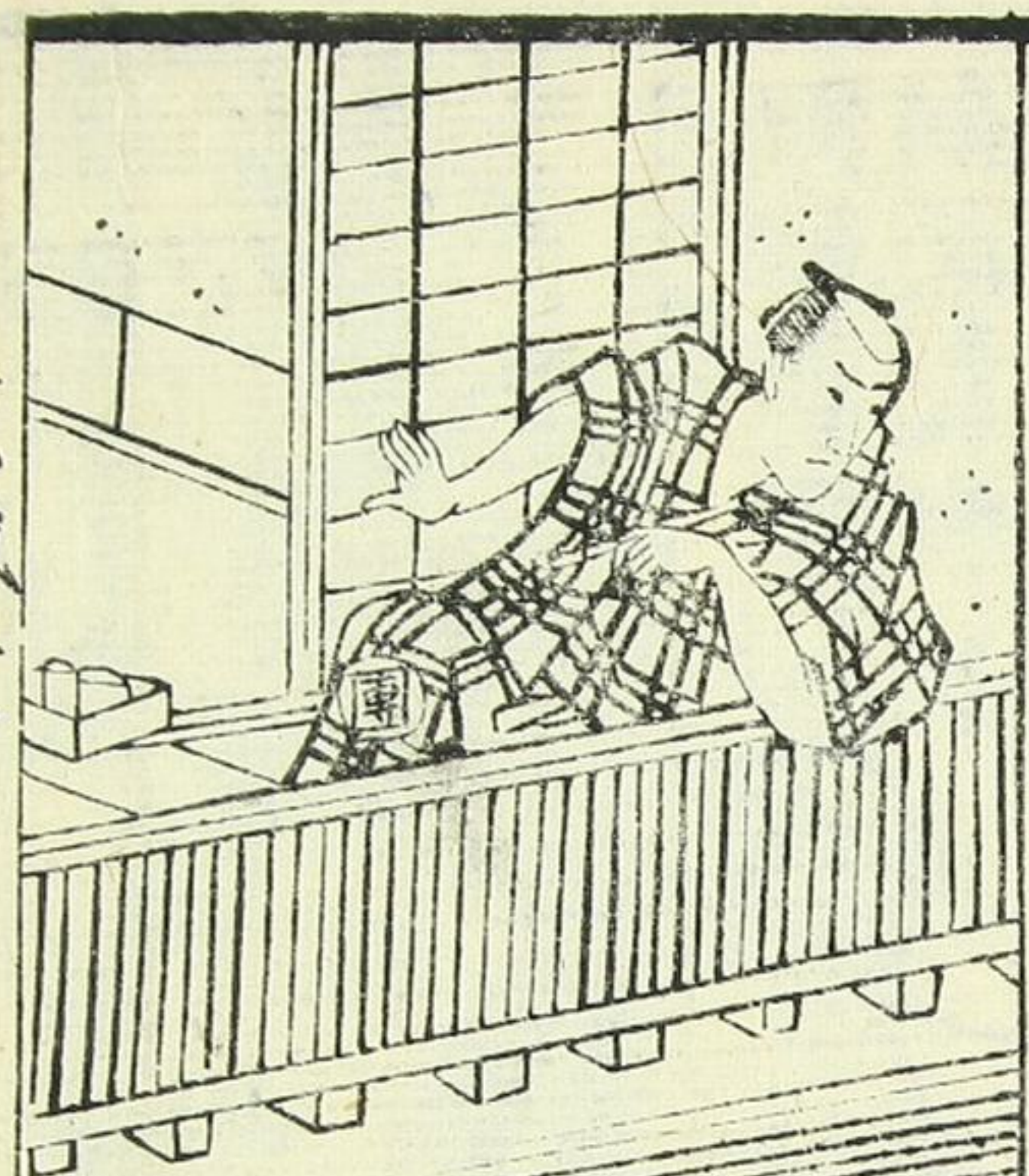


七 八 伝 下く 次へ

あふき内海はも属々あるの音先白念 宣らんと啓 弘化二年己の四月後若 市川堂十年と所なり

九 義あり 下く 次へ





流幾三

中村屋へ出
 鞠るれば是へ
 一

まよひ三四年
 出初る世が
 下先
 三

海老蔵が志願
 由是又建お候
 乃面き海老蔵
 せんい
 八先淋と悔悟
 五

六 剃髪巨匠と
 一死の出初不
 家のね云十
 八重の内より由の匠
 伎の新進帳波兼
 と初むるりやと舞
 七



次へ

流幾三

久々おその
 お用は得
 二

小茶
 とどろ
 戸張
 此の糸
 清と初め
 古今の
 大入る

二 一幕如勸は
 一 糸不深巻を
 三 糸と合せり
 四 上坂
 五 絞ととよ



つぎ 海老花 花の地

お名残の口上ありて利發

色と披露ありことふ

舞臺へ再度の出初奉

おのとひ

舞臺の不成

おのまきぢん おのまき

元今その寅へうくと溜

さぬあきの

あくと

尾張名を心

無乃

中

何の障りき海老

花のさ

花へ

送て再

交笑

の味の

舞臺

と初め

さぬあ

大八

たりとぞ

荒磯割烹鯉魚腸

名八代目團十郎のはさし

守川周重

籬の菊操鏡

渡辺支京

三編

金花胡蝶

守川周重

三編

冬見立闇鳩

渡辺支京

三編

藻塩草近世奇談

渡辺支京

三編

舎 繪問屋

日本橋區兩國吉川町五番地

堤 古兵衛

守川周重画

青成堂書

下



荒磯割烹鯉魚腸

三篇







形ひとあひ入る (三)
 け身の (二) 何より

への 獲り 状 態 香
 おあれ ば ば
 佐 伯 地 不 法 券 と 名
 秋 冬 小 あ れ ど
 月
 中 小 ま り
 ね ば
 五 古
 同 ち ゅ う ざ う が
 ほ て あ ら せ と
 失 ひ そ の 法 券 と 名 ま つ ち
 小 け 方 へ 太 尊 の 底 づ ぐ ぐ ぐ



つぎ 降 足 の 心 小
 あり する あり け び
 頼 り と 解 還
 しく 只 上 の
 形 以 小 の 一 生
 の 心 持
 公 事 者
 の か (一)

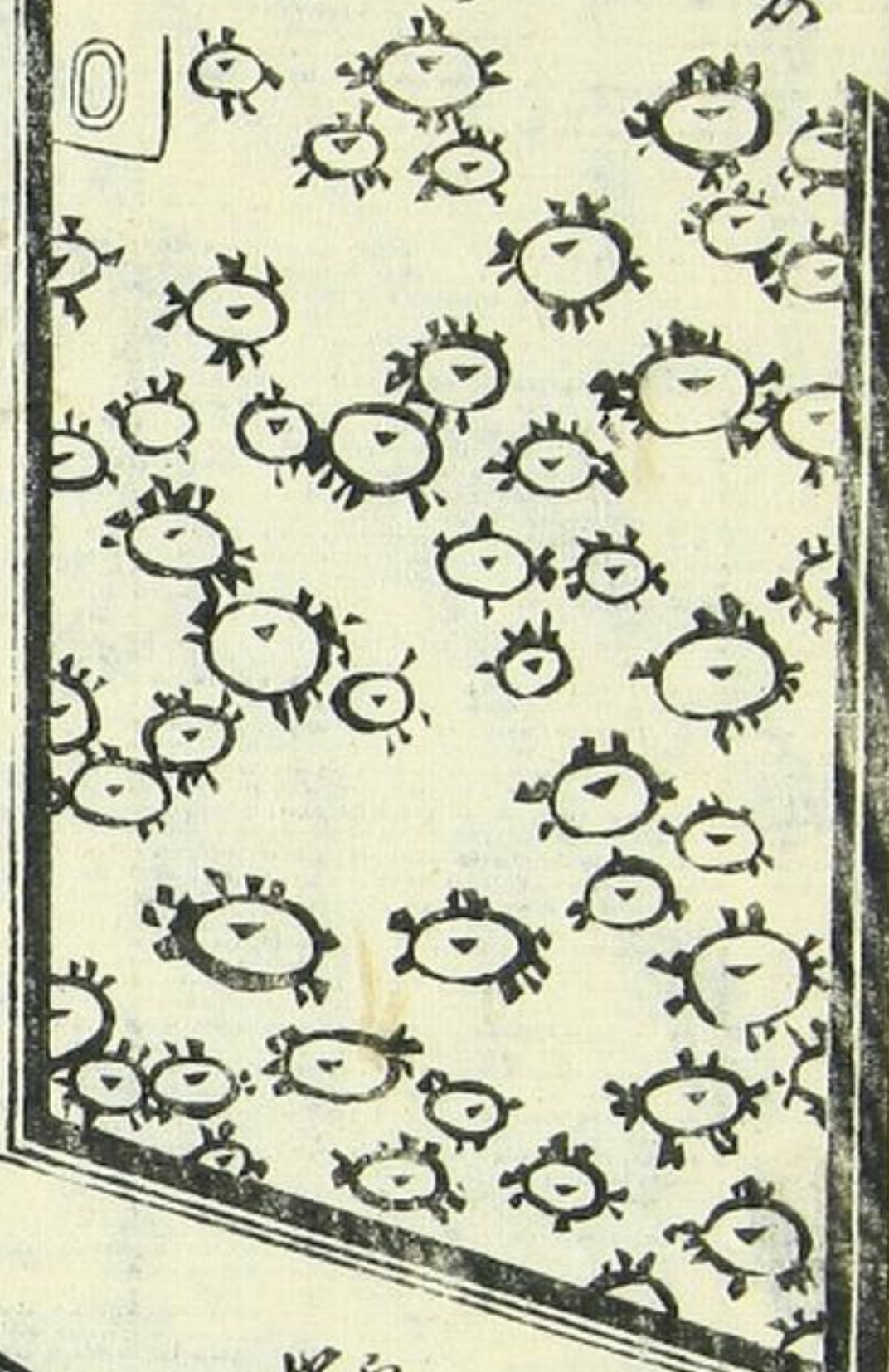
四 あり ち
 由 名 小 務
 由 家 督
 の 分 小 五

六
 え ち り と
 あ と 又
 珠 ち ら び 丸
 去 ち ら 際 小 (七)

八 徳 内 小 の 心 小

一 智恵

七ふらりて
 幼考り身
 小一ツのき
 りひお末
 くれは粒
 心殿ふ
 物め居る
 かつたの
 深えハ
 風邪小侵さ
 たあ方のり



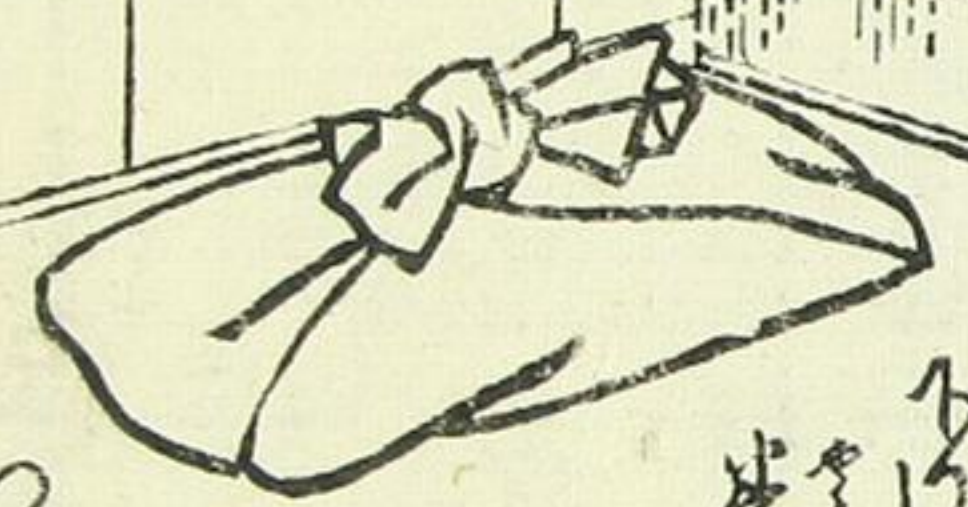
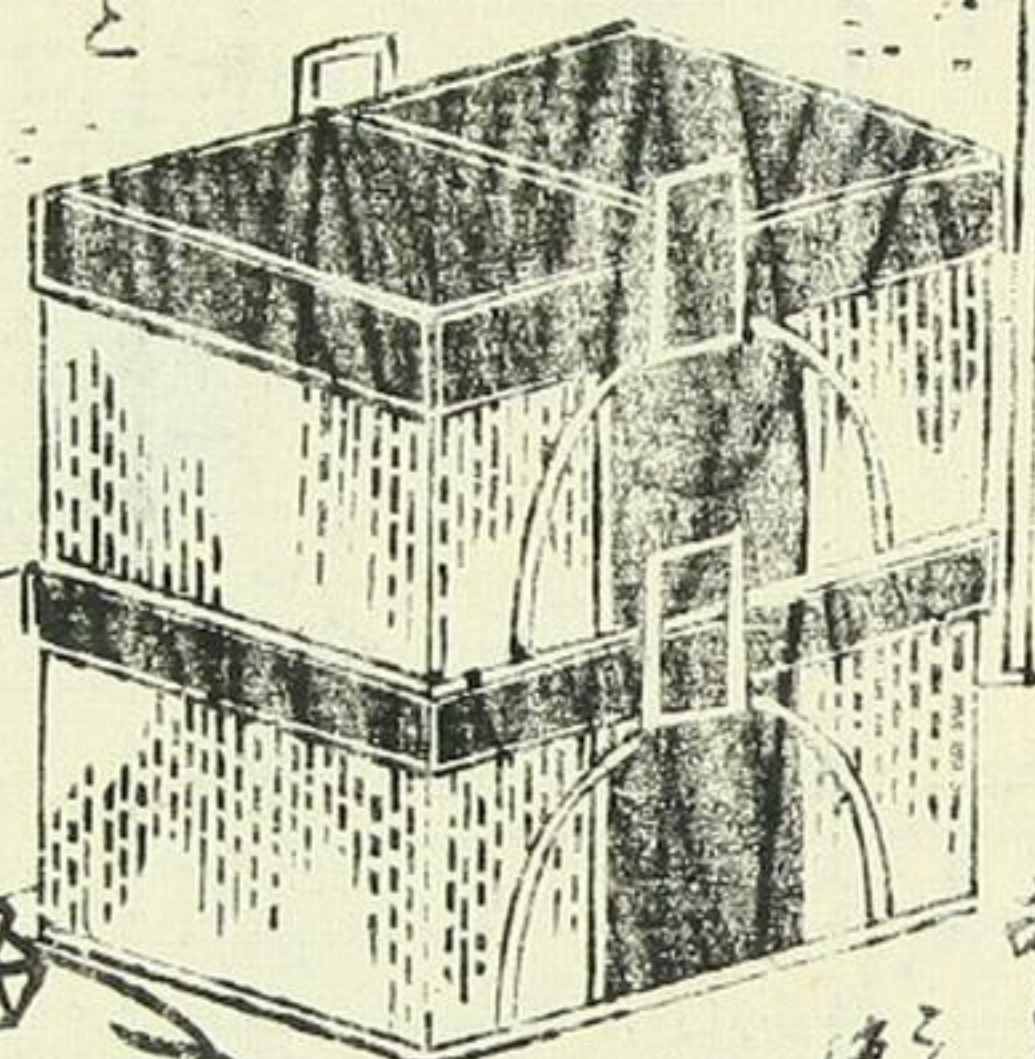
四 深えハ
 実家へ返りしが
 病氣とききあふ
 換ふてそふかふに



五
 六 忠義
 とめがら
 走邪六
 夫が病氣心
 芽といふ

ありと医助由
 老抱ふまさしりか
 忠義

ありと医助由
 老抱ふまさしりか
 忠義
 客作はと
 苦しき苦痛ハ
 ちうて腹おと
 ろく合おさるに
 まくまのぬい足男忘の
 下地あるんと一医者のおんま
 おそれぐの業用あろろ一



二 ながれど
 外の痛れに
 あまされが
 後室系
 自由む配さ



三
 三 忠義
 つひおお暇ありて

三
 三 忠義
 つひおお暇ありて

つぎそれ

とくまき

糸

暗

ら



ねど衣子

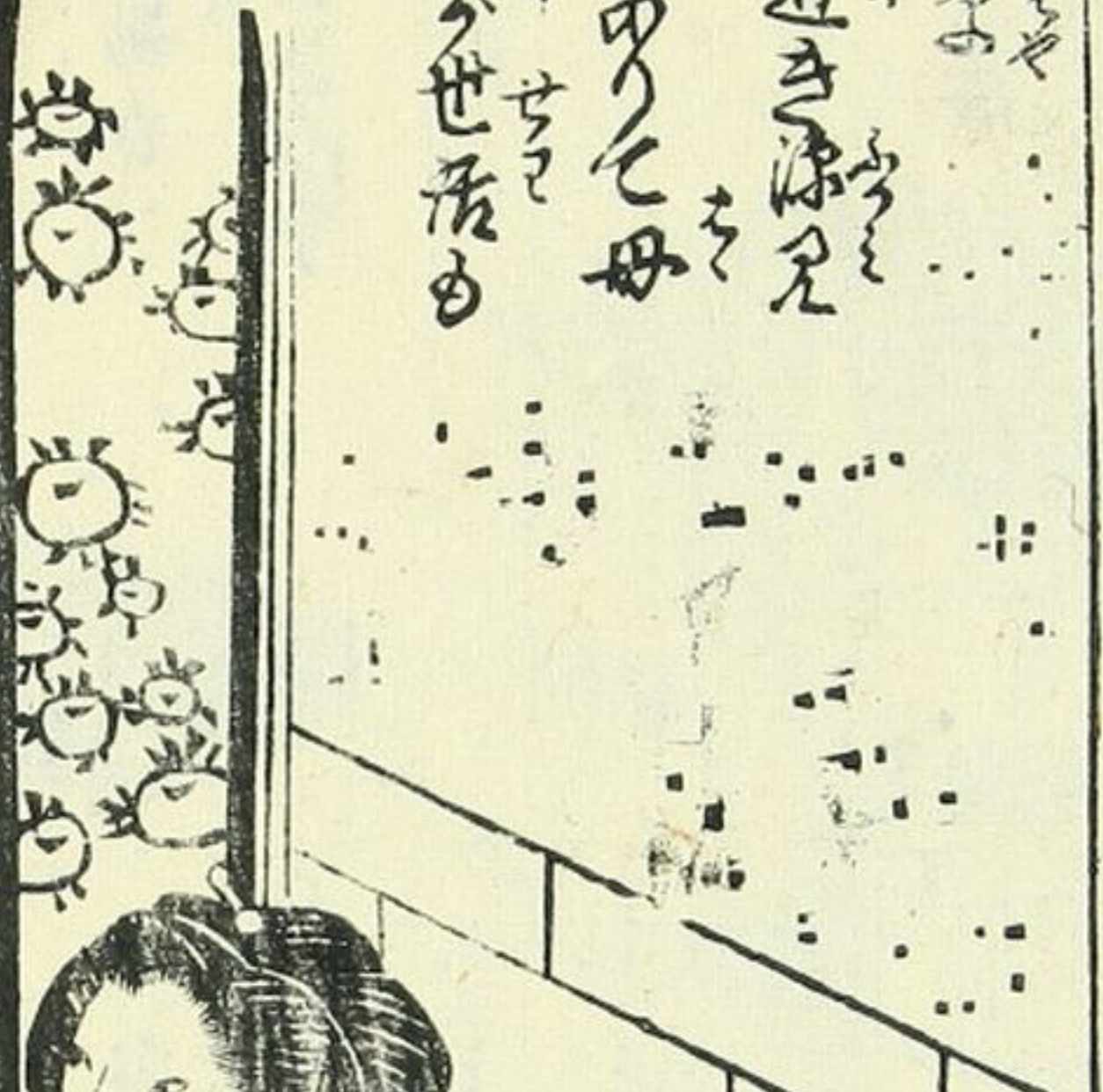
四十一道き深見

外角にありて母

お母并ぐ世活由

何となく

こゝろが



四ひとまが装

振ふ赴むせぬ

て三めづり由活活

ときまがその身に

あめらぬせ

ころ

り

せり

功

險

由

母

新に温

せは袖ひ
あせういや
け最良君
かえまあり
葉利あるす
よりのそめ
ゆめ振う
保夏之
温泉ふ
ゆあ
あすのが
ゆと
ゆに



二ゆえ

ゆはあし

三

糸のきと

あふとそめ

はひあひ

あ

ひ

痛

ひ

あ

あ

あめらぬせ
あふとそめ
はひあひ
あ
ひ
痛
ひ
あ
あ





三 源八が
 登方
 小女
 入の
 老外
 主人
 相様
 て
 廿一
 加永七年

四 役者ハ
 三
 近
 行
 と
 之
 五 痛



八代目
 三升
 為小
 赴む
 中
 め
 それ

六
 入

つぎ 女は五線好むの
 件しを愛とも又花根
 とむじ彼湯なる
 湯はほしてより
 女ふと
 ろふ熱海
 ま七湯
 めづら
 つり門
 女小男
 の五人



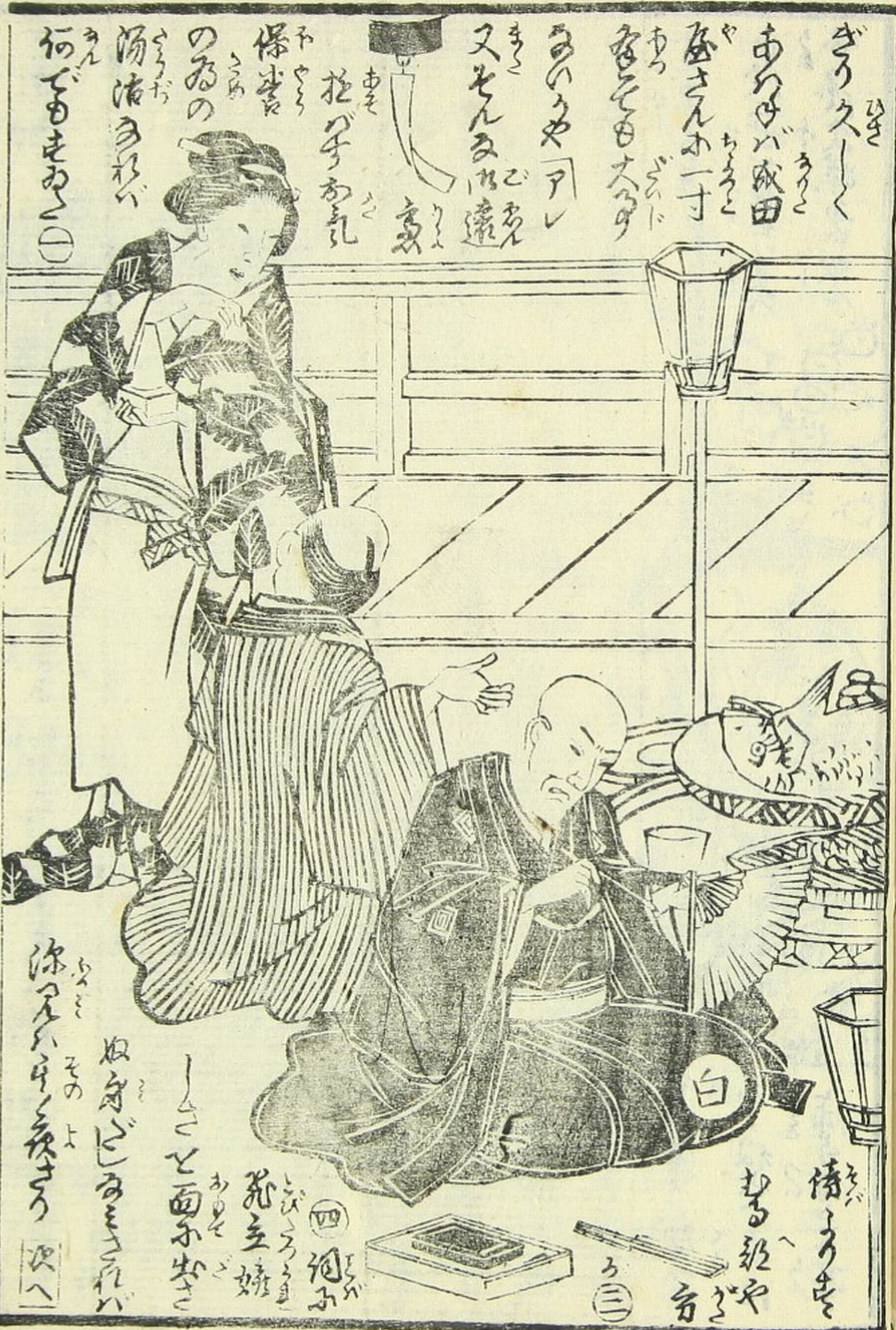
③ 客多きもの
 雅想ぬののも
 堂十郎が素報えん
 とそと
 けと
 ろぞ
 くときをき
 四及のふあは後
 女ふと
 女小男
 の五人

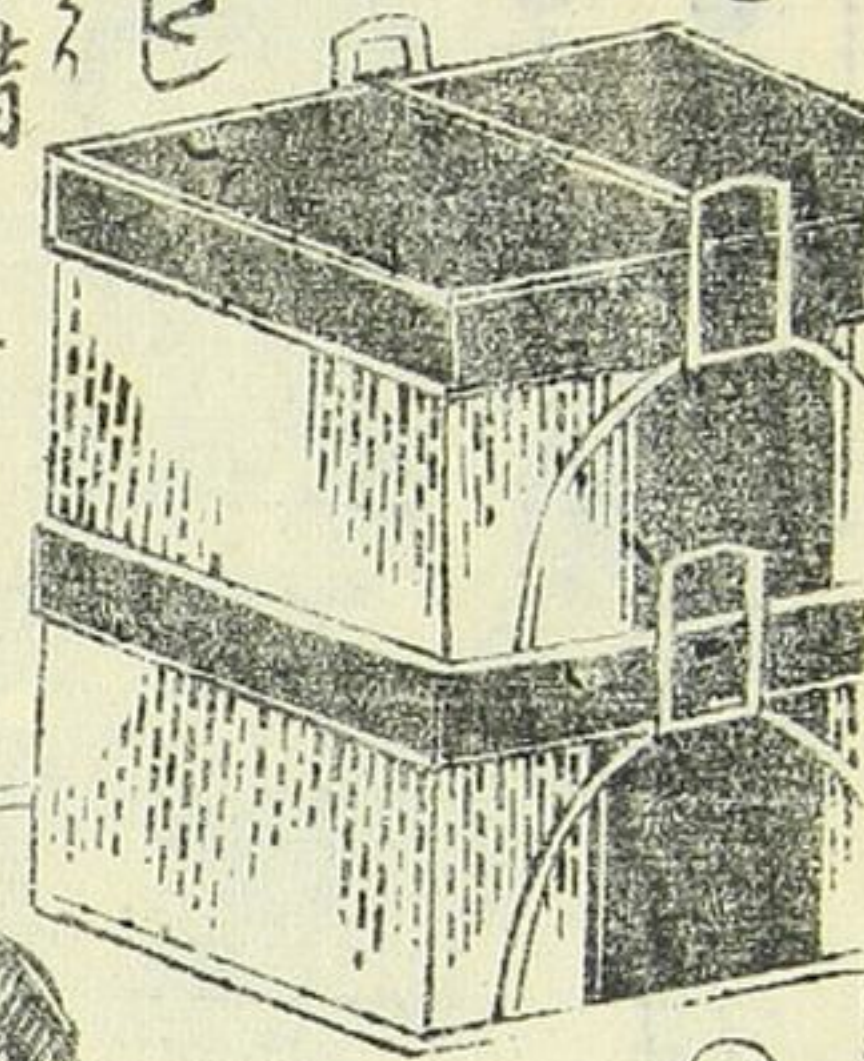


① 連のとも 秘恋不運
 せうが湯河 家のつか
 ぶしき 湯河の脱方
 が湯
 女小男
 の五人

③ 毎度旅客 難滞して是か
 湯河の湯は不運もす
 湯河の湯は不運もす

④ 代の
 湯河の湯は不運もす
 湯河の湯は不運もす



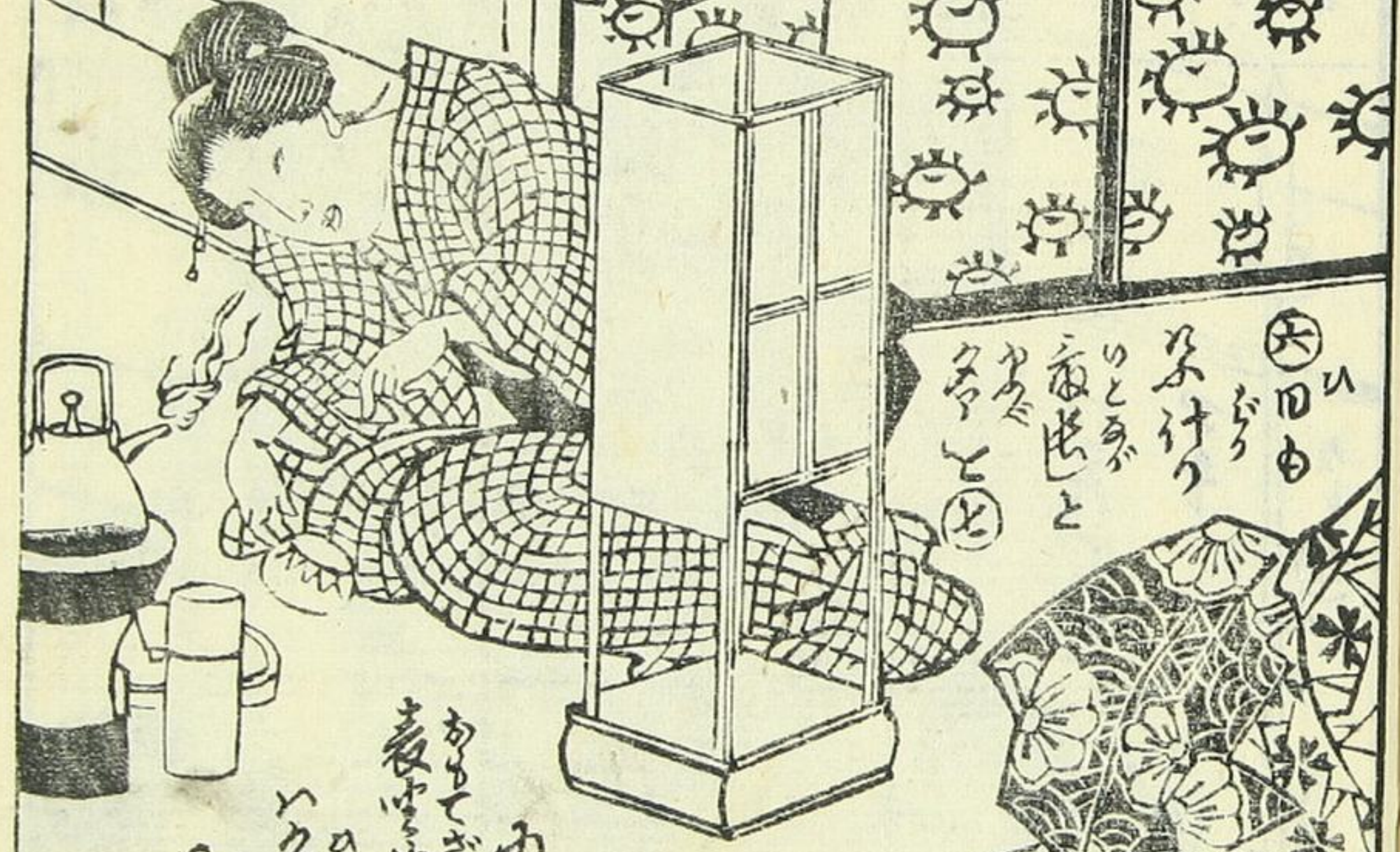


つぎあそ
あつてめ
福徳の
けり
下女ふかじ
て三升が借
切る中後小
おせき
三升封押切その
文ととふと下せが
先年ちう
ら二世と世に
必らば夫婦あも願ん



二 女子小
三 是と世に
四 事と何と
五 婦と世に
六 是と世に
七 是と世に
八 是と世に
九 是と世に
十 是と世に

と云て記
肌力
他物
か
家
幸
の
有
外



六
七
八
九
十

彦作綴

市中由

ひまわり

ひまわり

糸入の羽織の折目

きき声一途

周重畫



四 夕暮

の外より

おとくれ

なり

四石へ

明治十四年一月十七日

芝罘岩下四丁目二番地

編輯人久保田彦作

米沢町一丁目七番地

出版人堤吉兵衛

荒磯割烹鯉魚膳 五編 久保田彦作著

籬の菊探鏡 三編 渡辺武京作

冬見立闇鳩 三編 守川周重画

舎 地本問屋 日本橋區兩國吉川町五番地 青盛堂 加賀屋 堤吉兵衛

